

戦後50年の現在地

上唇や上顎に生まれつき亀裂がある口唇口蓋裂の患者を支援しているNPO法人「日本口唇口蓋裂協会」（本部・名古屋市千種区）が、ベトナムで無償手術のボランティアを始めて33年目を迎えた。ベトナム戦争の終結から50年の節目でもある今年は、3月22～31日に南部ベンチエ省へ日本から医師や看護師ら総勢54人を派遣。経済発展の陰で、都市部と医療格差が広がる地方での活動に同行した。

（ベンチエで、平井良信、写真も）



発行所 中日新聞社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
〒460-8511 電話 052(201)6811

2025年 4月28日(月)
(令和7年)

日本医師らに同行

口唇口蓋裂 無償で治療

■診察待ち
高層ビルが林立するベトナム最大都市のホーチミンから、南西に86km離れた農村部のベンチエ省。「医療隊を温かく歓迎します」。横断幕を掲げた中核病院「グエンティンチュウ病院」に、手弁当で渡航した口唇外科医や麻酔科医、小児科医、看護師らが集まった。

医療支援は現地の要請で1993年に始まった。ベトナム戦争の激戦地だったベンチエでは米軍が大量の枯れ葉剤をまき、口唇口蓋裂はその影響と信じられていた。科学的に証明されていないが、今も

経済的な事情で大勢の人が十分な治療を受けられずにいる。病院の待合室は23日午後、診療隊の初日の診察を待つ人であふれ返った。協会事務理事の夏目良門さん（68）が訪れた79人の唇や口の中央に縦に診察し、手術の可否を判断した。

うれしい再会もあった。約30年前、夏目さんの機嫌度で日本で難手術を受けたグエン・フアン・ドアンさん（36）は「病気でいじめられ、死ぬことも考えた。今生きてるのは皆さんのおかげ」と感謝を伝えた。



口唇口蓋裂の手術をする診療隊のメンバー。ベトナムのグエンティンチュウ病院で。

■即席チーム
翌日午前7時。日本から運び込んだ医療器材で作り上げた手術室で、愛知や東京、長崎など各地から集まった医師や看護師、現地スタッフが即席のチームをつくり、手術が始まった。

都市部と地方 広がる医療格差



上唇が割れた生後4カ月の女児の口元にミリ単位で線を引き、メスを入れる。成長を考慮して切った筋肉を丁寧に縫い合わせていく。2時間の手術後、母親のグエン・チー・ターさん（39）は「治らない」と諦めていた。日本から来た先生に感謝の気持ちでいっぱい。胸の中で眠る娘に柔らかな笑みを浮かべた。

手術は早朝から夜まで1日最大9件。医師らは所属や肩書の違いを超えて一つとなり、高い技術力で5日間を計39件の手術を成功させた。11回目の参加で診療隊長を務める井村英人さん（47）は「限られた時間で安全に手術を終えることが最も大切。一度でも事故があれば信頼を失う」と強調する。新型コロナウィルス禍の3年間を除き、ベトナムでは過去に3千件以上の手術を行い、全て無事故だ。



口唇口蓋裂の手術を終え、家族と過ごす子どもたち。

ベトナム戦争の終結から50年。外国資本の受け入れで経済は急速に発展したが、都市と地方の格差は広がった。過去20年で平均6・5%の高いインフレ率が、庶民を苦しめる。

■物価高
口唇口蓋裂の手術もホーチミンなど都市に集中し、地方は取り残されている。ベンチエで唯一、手術が可能なグエンティンチュウ病院では、日本に4年間留学した口唇外科医が1人で手術を担当。待ちきれずホーチミンまで手術を受けに行く親子もいるが、渋滞時はバスで4時間以上かかる。交通費や滞在費も必要だ。

今回、2歳の娘が手術を受けた母親（26）は「早く治してあげたかったが、ホーチミンまで行くお金はない。診療隊が来てくれるのを待っていた」と涙ぐんだ。

「医療は恵まれない人に寄り添わなければならない」と夏目さん。小児科医の馬場礼三さん（68）は「医者として一番幸せな仕事をさせてもらっている」と来年の再訪を誓う。最終日、病院を去る診療隊を笑顔の親子たちがいつまでも見送っていた。